

2018 年 7 月 Global Session のお知らせ

期日：7 月 21 日（土）10:30~12:00

場所：ガレリア 3 階会議室

ゲストスピーカー：崎 MiChi さん（同志社女子大教員）

タイトル：京都に住む国際児の課題と研究

コーディネーター：募集中

参加費：600 円 年会費：1000 円

主宰：Office Com Junto 児嶋きよみ

7 月の Global Session のお知らせです。崎 MiChi さんは、カナダ出身の日系のルーツを持つ方で、ゲストスピーカーとして 3 回目です。今回は、ご自身の研究テーマをプロフィールと合わせてお話しになります。子どもさんを持つ外国にルーツを持つお母さんのひとりでもあり、さまざまな課題が見えてきます。是非、参加され、多文化共生としての考え方をともに探っていく機会としていただきますようお願いします。

英文と日本語があります。どちらも崎 MiChi さんご自身の文です

Kyoto is internationally well known as being one of the most popular tourist destinations in the world and has been receiving wider attention as an important hub for cutting-edge academic research, the Arts and entrepreneurship, as well as being known for its safe and quiet environment (Kyoto Research Park website, 2016; Kyoto Chamber of Commerce and Industry pamphlet, 2008). As a result of its popularity, the prefecture has experienced a drastic growth in immigrants - foreigners coming to live long-term in Kyoto together with their families. The majority of their children are enrolled in the local public schools.

Throughout the past 25 years, research on ethnic minority youth (termed in Japanese as “*Gaikoku ni roots o motsu jidou seito*”, or in English, “school-age children with ethnic roots abroad”) has been conducted in the Kansai region, particularly in prefectures such as Osaka, Kobe and Shiga, which have dense populations of newcomer immigrant youth (Ishikida, 2005, Shimizu & Bradley, 2014). As for the newcomer immigrant youth population in Kyoto, however, are sporadic and are few in comparison. With such low numbers spread out all over Kyoto Prefecture, limited assistance is offered by the prefecture and city governmental bodies for desperately needed educational and cultural support for these children and their families. Ethnic

minority youth and their families in Kyoto therefore mostly rely on support from grass-root level organizations, who often lack human resources and funding.

My Research Questions:

- 1) What academic and social obstacles are ethnic minority youth and their families facing at Japanese public schools in Kyoto?
- 2) How much awareness and support of students' cultural and linguistic backgrounds is there at public schools?
- 3) What types of learning support services education path guidance, social support are readily accessible to ethnic minority youth and their families in Kyoto?

(1) (氏名) 崎 ミチ・アン (さき みち あん)

(2) (出身国) カナダ

(3) (勤務先) 同志社女子大学 表象文化学部 英語英文学科 助教

(4) プロフィール

- ・ 1996 年来日日本人の夫と 1 児の母。
- ・ 2013 年 11 月 (学校法人) 京都インターナショナルスクールの理事長に就任
- ・ 2016 年 4 月大阪大人間科学研究科に所属 (博士後期課程) 「多文化教育」の研究を始める
- ・ 2017 年 外国にルーツを持っている国際児童の学習応援と通訳ボランティア活動を始める
- ・ 2018 年 4 月 京都市多文化施策審議委員のメンバーに就任

私自身、日本に長く居住しており、22 年の滞在経験を通して、多くの移民が体験する様々な困難、誤解、意見の相違といった状況をよく把握している。しかし、国際児が直面する問題は大人のものとは異なり、極限状態まで追いつめられるケースも多い。現在、私は京都に住んでいるが、京都は日本で人気のある観光都市として世界的にも知名度が高く、また最先端の学術研究、芸術、起業家活動の重要な拠点として広い注目を集めるとともに、安全・安心で落ち着いた生活環境でも知られている (京都リサーチパーク HP,2016、京都商工会議所パンフレット、2008)。

そのため、子連れで京都に長期滞在する外国籍の人々が急激に増えており、その子どもたちの多くは公立 学校で学んでいる。この 25 年間、ニューカマーの移民の子どもについての研究が、国際児数の多い大阪、神戸 (兵庫)、滋 賀を中心とする関西圏で行われている (Ishikida,2005、Shimizu & Bradley, 2014)。しかし、前述の 3 府 県と比べて、京都の国際児数は少なく、また点在している。全体数が少ない上、京都府下に国際児が点在 していることから、国際児やその家族が切実に求めている教育的・文化的支援は、京都府や市の自治体か らは十分には受けられないのが現状である。それゆえ、京都に暮らす国際児とその家族が拠り所とするのは「草の根レベル」の組織や団体となるが、それらの組織・団体は人員不足、資金不足の悩みを抱えていることが少なくない (京都市教育委員会と母語支援・通訳ボランティアとのヒアリング,2016)。これらの現状を踏

まえて、人種・言語のマイノリティの子どもの教育の現状をより深く調査し、早急に課題に取り組むことが求められている。私の研究を通して明らかにしたいことは、第一に、京都の公立学校に通う国際児の学習面での実体験である。とりわけ公立学校の現体制において国際児が必要としている学習支援を調査し、また学校で後れを取ることなく、充実した学校生活を送るためにどのような支援やサポート（学習、母語、文化、心理など）を必要としているかを探りたい。

以上をふまえて、これからも、

どのような教育資源や社会的支援ネットワーク（家庭教師、メンタリング、進路指導、高等教育機関への進学支援など）が利用可能で、京都府下の公立学校に通う国際児や家族に適しているのか、どのような教育システムが効果的であるかを研究するとともに、皆さんと一緒に考えて、取り組みを強化したいと考えております。